

『肝臓と免疫 “類洞壁細胞”』

肝臓川柳



『類洞で 有害物質 止めるんだ』

止める…とめる…とめんえき…免疫……汗汗 orz

……………ノノノノノ

免疫といっても漠然として分かりにくいですが、細菌やウイルスなどの有害物質から自分を守る力も免疫力に入ります。肝臓は、消化管などの全身の臓器から“門脈”を介して一度血液を集めますので、様々な有害物質が全て肝臓に集まります。門脈は肝臓に入ると全体に細かな洞窟のような隙間となり、肝臓の細胞と接します。この洞窟のような隙間を“類洞”と呼びますが、類洞の壁には、大変重要な役割を果たす

- 内皮細胞
- ★ クッパー細胞
- 肝星細胞
- ★ ピット細胞

という4つの細胞（類洞壁細胞）がへばりついており、

この中の★クッパー細胞 ★ピット細胞 が免疫にかかわっています。

これらの細胞の働きがないと、有害物質は素通りして肝細胞に入ってしまう、身体全体に障害が発生し、生命が維持出来ません。

その他にもたくさんの働きを持つ“類洞壁細胞”。名前はとっつきにくいですが、大変重要な細胞です。

最近岩波新書から出版された、順天堂大学渡辺純夫教授著の『肝臓病—治る時代の基礎知識—』P44-47に簡単に載っていますので、興味のある方は一読下さい。



これだけ覚えておけば損はない！

今 回 の ポ イ ン ト

門脈が肝臓内で接している部分『類洞』

その壁にある4つの細胞『類洞壁細胞』が免疫に重要な関わりを持ち生命を維持しているのです

(文 : 福井県肝疾患診療連携拠点病院協議会 野ッ俣 和夫)